

見え方について

3つの台風が日本に近づいている7月16日(木)に第125回障害者地域生活支援研究会が開催されました。今回のテーマは「見え方について」です。

最初に、医療法人むらかみ眼科医院 副院長・眼科専門医 村上美紀さんに「見える」ってなんだろう?と題して「見える」仕組み等をお話しして頂き、その後に参加者の皆さんにロービジョン*体験眼鏡を装着して体験して頂きました。

*ロービジョン
病気やけがなどのために十分な視力が出ない、視野が狭くなるなどの状態(弱視、視野狭窄など)



体験眼鏡は、視力低下、視野狭窄(見える範囲が狭い)、中心暗点(真ん中が見えにくい)の3種類。2人1組のペアになって食べ物や文章のスライドを見て頂くと同時に、体験眼鏡をかけた人が「見えない、見えにくい」時にどのような行動を取るのか、行動を観察して頂きました。

体験した方の感想としては、「見えにくかった」「移動するのにも怖くて困った」とあり、行動を観察した側からも、「見えてなくて困った感じがした」とのことでした。

実際視覚に障害のある人が認知の問題等で、「**眼で「見えていて」も、見えたことが認識できない**」、「**眼で「見えていて」、見えたことが認識できていても、見えると言葉で表現できない**」、「**「見えていない」のに、言葉で「見えていない」と表現できない**」ことがあるとのことでした。

また、発達障害による感覚過敏のために光を眩しく感じて「見えにくい」人や、眼の疾患による「見えにくさ」を精神障害による「見えにくさ」と勘違いして、眼科受診が遅れることもあるとのことでした。

「見える」「見えにくい」「見えない」人の行動を見て、生活のしづらさから周囲の人が「見え方」を意識して「見えにくい」「見えない」と気付くこと、普段の生活で見やすい環境をつくり支援することが大切であるとのことでした。

支援研

援

支援研

支援研

支研

続いて福祉用具プラザ北九州 視覚障害生活訓練等指導者 歩行訓練士 武田 貴子さんに北九州市の視覚障害者数の現状や、福祉用具プラザの紹介、北九州市が行っている中途視覚障害者緊急生活訓練事業をご説明して頂きました。

視覚に障害のある方の2割が全盲で、8割がロービジョン*と、ロービジョンの方が多く、「どういった見え方をしているのか、どういったことで困っているのかを知ることで本当の支援が始まる」とのことです。視覚障害者だから、「大きな字を書くといい」という考えを捨てて、その方に適切な支援方法を聞くことが大切で、例えば「黒地に白字で書く」「字体を工夫して太く書く」「コントラストをつける」等の支援方法があるので、今回の支援研究会を機に覚えて帰って欲しいとのことでした。



「中途視覚障害者緊急生活訓練事業」は、自立支援法に基づいた地域生活支援事業の一環で、市内在住の身体障害者手帳をお持ちの視覚障害者の方を対象に、歩行訓練士が、自立に必要な「移動訓練と情報提供」を無料で行なっているとのことでした。訓練終了後は就職や視覚特別支援学校へ進学と、色々な支援とたくさんの方々との連携が必要なので、「この事業を知って頂き、ご協力して頂きたい」とのことでした。

台

台風の接近に伴う天候不順の為、参加者数は少なめでしたが、実体験をすることで視覚障害のある方への理解を深めることができた実りある支援研究会でした。

本日の参加者は31名。内新規の方は7名でした。ありがとうございました。



けんたん

※こちらの議事録は
北九州市障害者自立支援協議会の
ホームページでもご覧いただけます。
<http://kitakyushu-net.shien-c.com/>



しえんちゃん

